

令和 8 年度 学校経営計画

1 学校教育目標

障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する力を養い、友愛の中に自己を実現し、社会的に自立する明るくたくましい人間を育成する。

〈校訓〉 ○仲よく楽しく学びましょう ○恐れずくじけず励みましょう ○明るく正しく生きましょう

2 学校の特徴

- ・聴覚障害のある幼児児童生徒と軽度の知的障害のある高等部の生徒が、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自立して社会参加することや、共に学び、共に生活して、地域社会で活躍することを目指して学んでいる。
- ・聴覚障害のある生徒を対象とした、幼稚園、小学部、中学部、高等部、高等部専攻科があり、幼稚園には0歳、1歳、2歳児のための乳幼児教室がある。また、軽度知的障害のある生徒を対象とした、高等部に福祉・サービス科を設置している。
- ・個別的教育支援計画及び個別の指導計画を作成し、一人一人の教育的ニーズに応じた教育を行っている。
- ・コミュニケーション能力を養い、社会性や望ましい人間関係を育てるために、それぞれの学部が地元の保育園や学校と交流活動を行っている。
- ・聴覚障害教育センターとして、幼稚園・保育園・こども園、小・中・高等学校、特別支援学校に在籍する聴覚障害児及び卒業生を含む成人聴覚障害者を支援している。
- ・中学部・高等部の生徒全員が卓球部に所属し、北陸地区聾学校体育連盟・中学校体育連盟・高等学校体育連盟主催の各大会に参加している。

3 学校の現状と課題

ア 現状

- ・聴覚口話法を基本とし、個々の実態に応じた有効なコミュニケーション手段（手話、指文字、筆談等）を用いて、コミュニケーション能力の育成を図っている。
- ・医療体制の充実による障害の早期発見や地域の学校への進学等により、幼児児童生徒数が減少し、一人学級、少人数学級が多く、集団による学習活動が難しくなっている。
- ・障害の重度・重複化、多様化により、幼児児童生徒の個々の教育的ニーズに応じた教員の指導力の向上が求められる。
- ・職業観を高め、自分に合った進路選択ができるよう幼児児童生徒の発達段階に応じた指導実践や情報発信が求められる。また、聴覚障害生徒の高等部卒業後の就職や進学、軽度知的障害生徒の就労支援等多様な進路希望に対応するため、個々に応じた進路指導の充実が求められる。
- ・聴覚障害教育センターとして、地域の聴覚障害幼児児童生徒のニーズに応じた支援を提供できるよう、地域の学校や関係機関と連携し、聴覚障害教育の充実を図ることが求められており、聴覚障害教育における専門性の維持・向上が必要である。
- ・防災や感染症予防など、緊急時における校内の体制づくりに努め、危機管理に対する対応力を強化する必要がある。
- ・幼児児童生徒数の減少から教員数が減少し、今後、学校の小規模化が予想される。そのため、業務の精選や分掌業務の統合など学校運営上の工夫が必要となってくる。

イ 課題

- ・周囲の人と関わりながら遊びを発展させていくための支援の在り方を探る。
- ・全学部の保護者を対象とした進路学習会や多角的な情報発信の充実により、発達段階に応じた進路理解を深め、早期からの意識向上を図る。

4 学校教育計画

項 目			目標・方針及び計画	
1	学習活動	教育課程 (教務部)	目標	○効果的な指導計画の作成及び活用・評価のために、個別の教育支援計画、個別の指導計画、成績関係書類等の関連を整理し、作成に取り組む。
			計画	・法令等の根拠を参照しながら進める。 ・校務支援システムの各書式を確認し、記入例や作成計画、マニュアル等の整備を行う。 ・他校等から情報を収集したり、各学部と意見交換し合意形成したりしながら作成する。
		教科指導 (幼稚部)	目標	○幼児が周囲の人と関わりながら遊びを発展させていくための支援の在り方を探る。
			計画	・幼児の実態を把握し、情報共有を行う。 ・それぞれの幼児の期待する姿について共通理解を図る。 ・期待する姿に近づくための遊び場面の設定と支援について検討を行い、実践・振り返りを行っていく。
		教科指導 (小学部)	目標	○学び合い活動を通して言語力を高め、主体的に課題を解決しようとする児童を育てる支援の在り方を探る。
			計画	・児童の言語力やコミュニケーション力、自己理解に関する実態を見直し、共通理解を図る。 ・児童の言語力を高め、主体的に課題を解決しようとする授業づくりについて検討する。 ・掲示やお知らせボード等、児童の言語力を高める環境づくりについて検討する。
		教科指導 (中学部)	目標	○対話や協働を通して、協力して課題を解決することができるようにするための指導・支援の在り方を探る。
			計画	・中学部における「対話や協働により主体的に課題と向き合い、解決しようとする」生徒の姿を共通理解する。 ・生徒の実態を把握し、情報共有を行う。 ・効果的な場面設定を検討し、やり取りや話合いの事前指導と振り返りを行う。
		教科指導 (高等部)	目標	○対話や協働により新しい解や納得解を見出すことができるようにするための支援の在り方を探る。
			計画	・生徒が自問自答する場面や教師とやり取りする場面、自分以外の生徒の考えを知り自分を見つめ直す場面等を設定し、自分の中に新しい考え方を見付けたり自分とは違う他者の考え方を認めたりすることができるように支援方法を検討する。 ・学部行事において、聴覚障害の生徒と知的障害の生徒が対話や協働する機会を設定し、お互いを理解し合うことが、自分を見つめ直したり、相手に自分のことを主体的に伝えたりすることにつながるように支援方法を検討する。
2	学校生活	生徒指導	目標	○発達段階に応じた指導を通して規範意識を育み、ルールやマナーを主体的に守ろうとする態度の育成を図る。
			計画	・生徒心得等を見直し、生徒に周知する。 ・学校や社会のルールやマナーを知り、理解することで安全で楽しい学校生活を送ることができるようにする。 ・外部講師を招いたり、道徳科等の授業と連携したりして、校内外のルールやマナー等を理解する機会を設定する。
		保健	目標	○幼児児童生徒が、噛むことの大切さを知ることを通して、よく噛むことの意識を高め、習慣化を図ることができるようにする。
			計画	・年に2回、噛むことについてのアンケートを取る。 ・学部集会等で、よく噛むことの大切さを知らせる。 ・噛むことをチェックできる「咀嚼チェックガム」等を使い、咀嚼チェックを行う。 ・月に1回、給食で「かみかみメニュー」を取り入れる。

3	進路支援	進路指導	目標	○全学部の保護者を対象とした進路学習会や多角的な情報発信の充実により、発達段階に応じた進路理解を深め、早期からの意識向上を図る。
		重点2	計画	・年3回以上の説明会や意見交換会を開催し、動画配信の活用等により、全学部の保護者が参加しやすい環境を整える。 ・保護者が、卒業後の生活や就労、幼小期から家庭で大切にすべきこと等について具体的な情報を得られるように、「先輩保護者に学ぶ」機会を新設する。 ・進路だよりやHPで発達段階に応じて今取り組むべきことが伝わるように事前にアンケート等で保護者のニーズを把握する。 ・幼稚部から高等部までの一貫した教育を通して社会自立のための基礎づくりを推進するため、部内及び関係学部で進路情報を共有する。
4	特別活動	特別活動	目標	○幼児児童生徒が主体的に行動し、互いによりよい関わり方ができるようにする。
			計画	・児童会、生徒会を中心に全校で取り組める活動を企画し、実行することで、普段の学校生活の中で関わる機会を増やすようにする。
		学校図書館	目標	○図書室の整備や図書室利用の機会の拡充を図る。
			計画	・学校図書館司書の助言を基に、見やすく借りやすい図書の配置を行う。 ・貸出率が向上するよう、図書委員会で本の紹介や本に興味をもってもらえるような活動を企画する。
5	その他	PTA活動	目標	○PTAの委員会企画行事が充実した活動となるよう支援する。
			計画	・保護者のニーズを把握するためのアンケートを実施し、本校幼児児童生徒に合った活動を企画できるようにPTAをサポートする。 ・他分掌や各学部で協力を依頼し、それぞれの活動や研修など保護者の参加が可能なものについて呼び掛けを行い、少しでも多くの保護者の利益につながるような活動を提供する。
		教育相談	目標	○聴覚障害教育センターに関する情報発信に努め、聴覚障害児の在籍校（園）のニーズに沿った支援を行い、教育相談の充実を図る。
			計画	・聴覚障害教育センターのリーフレットを県東部の市町村教育委員会等に配布すること、ホームページの教育相談のページの見直しを図ることを通して本校の役割の理解啓発に努める。 ・定期的な教育相談利用者の在籍校（園）、県東部の難聴特別支援学級を訪問して、聴覚障害教育センターの役割を説明し、在籍校（園）のニーズを聞き取って必要な支援に当たる。 ・聴覚障害教育に関する講座を開き、関係職員の専門性向上を図る。
		研修	目標	○各学部における対話的な学びや協働的な学びの在り方の研究を推進し、学校課題解明を図る。
			計画	・学校課題の共通理解を図り、各学部の研究主題の設定及び研究計画の立案を行う。 ・対話や協働を取り入れた授業研究や事例研究を通じた成果と課題について共通理解を図る場を設け、学部間の連携を深める。 ・2年間の研究を研修のあゆみにまとめる。
		図書・情報	目標	○幼児児童生徒の情報活用能力向上と情報モラルの理解を促進する。
			計画	・研修会を実施して、情報活用能力向上と情報モラルの理解を図る。 ・ICT機器を活用し、個別最適な学びを目指した授業実践を行う。 ・デザインツール（Canva）や生成AI等の児童生徒利用のための環境整備や研修を行う。

5 今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和8年度 富山聴覚総合支援学校アクションプラン（幼稚部） - 1 -		
重点項目	学習活動	
重点課題	幼児が周囲の人と関わりながら遊びを発展させていくための支援の在り方を探る。	
現 状	昨年度は制作遊びを取り上げ、空き箱や空き容器等を用いて「わたしのいえ」「わたしたちのまち」を作る活動を行った。この活動では、以下の成果が見られた。①共通して経験したり、認識したりしている事柄を取り上げたことで意欲的に活動に取り組めた。②自分人形や車を作ることによって友達の家へ遊びに行くようになり、関わり合いが増え、町作りへと発展できた。一方、やり取りのモデルを示したときは子供同士でやり取りする姿がみられたが、場面が変わるとやり取りが続かないことが多いという課題が残った。 今年度は昨年度遊びをリードしていた2名が修了・転校し、新たに2名の年少児を迎えたことで、対象幼児の実態が大きく変わった。在籍児は、「他者との関わり」で見たパーテンの遊びの分類でいうと、年少児2名は「遊びに専念しない行動」や「ひとり遊び」、年長児は「並行遊び」が主である。自分から周囲の人と関わって遊ぶ姿は少ない。そこで、昨年度と同様に実態把握から丁寧に進め、興味関心に沿った遊びを設定する必要がある。昨年度の制作遊びで培った環境設定や一人一人に合わせた支援、保護者との連携等は引き続き行っていきながら、教師や友達に自ら働きかけながら遊びを発展させていくための支援方法を探っていききたい。	
達成目標	幼児が周囲の人と関わる回数を増やすと共に、やり取りが続くようにする。 ・遊びの中で教師や友達に自ら関わる回数が50%増える。 ・幼児同士のやり取りが3回（発信―受信―応答等）続く。	
方 策	・ままごと遊びを設定し、幼児の実態と期待する姿、支援方法を協議し、共通理解を行う。 ・年度初めに、ままごと遊び30分の中でのやり取りの回数を調べ、ベースラインとする。 ・日々の遊びの中で関わり方のモデルを示し、模倣を促したり、一緒に行ったりする。 ・自立活動や日々の生活で言葉や手話、身振りを増やし、コミュニケーション能力を高める。 ・日々の授業後に支援方法や環境設定等について協議し、授業改善を行う。 ・年長児は年少児が分かるような聞き方のレパトリーを増やし、年少児は質問に答えられるようにする。	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）

令和8年度 富山聴覚総合支援学校アクションプラン（進路指導部） - 2 -		
重点項目	進路支援	
重点課題	発達段階に応じた進路理解の促進	
現 状	高等部および中学部においては、進路希望調査や保護者懇談会に基づき、個々の希望や特性に応じた進路相談や就業体験を計画的に実施し、生徒の進路選択に向けた支援に継続して取り組んでいる。進路指導部においても、実習先の確保や進路に関する情報提供に努めている。 一方で、幼・小・中・高の一貫した教育を通した社会自立のための基礎づくりや、学部・学年に応じた系統的な進路指導、生徒や保護者への進路情報の提供と理解促進については課題となっている。本校には幼稚部から高等部までの幼児児童生徒が在籍しており、各学部の発達段階に応じた進路に関する情報提供が求められているが、進路に関する取組は高等部中心になりやすい傾向がある。 今年度は、全学部の保護者を対象とした進路説明会や進路だより、ホームページ等の情報提供に取り組むこととした。早い段階から進路に関する理解を深めることができるよう、取組の充実を図る。	
達成目標	全学部の保護者を対象とした進路に関する説明会や学習会を実施する。	保護者のニーズを踏まえた進路だよりの発行及びホームページ等による情報発信を行う。
	年間3回以上	年間2回以上
方 策	・進路に関する説明会や学習会は、内容に応じて全学部合同や幼小・中高に分けるなど、実施形態を工夫し、必要に応じて動画配信を行う。 ・既存の「先輩に学ぶ」に加え、「先輩保護者に学ぶ」座談会を設け、幼小期から家庭で大切にしてきたことや就業体験時の支援、就労前後の家庭の役割等を聞き、家庭で取り組むとよいことを考える機会とする。 ・進路だよりやホームページ等で取り上げる内容について、保護者への聞き取りやアンケート等を通してニーズの把握に努める。 ・把握したニーズを踏まえ、発達段階に応じた今取り組むとよいことや進路の情報について具体的に分かりやすく発信する。	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）